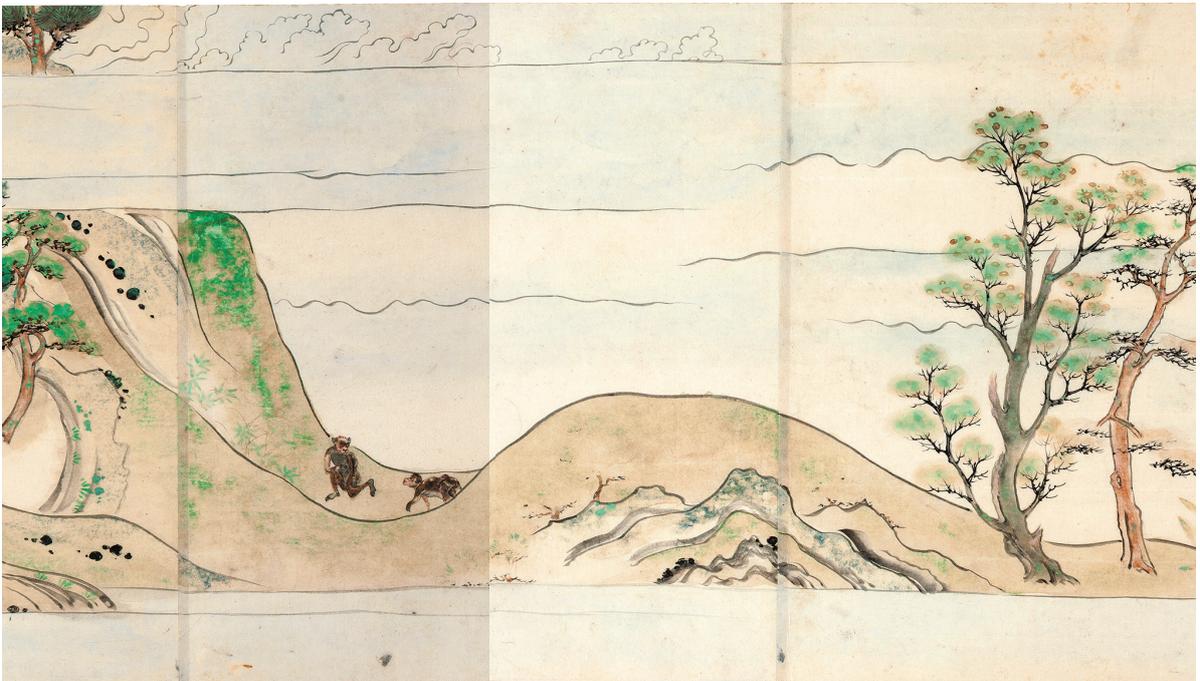


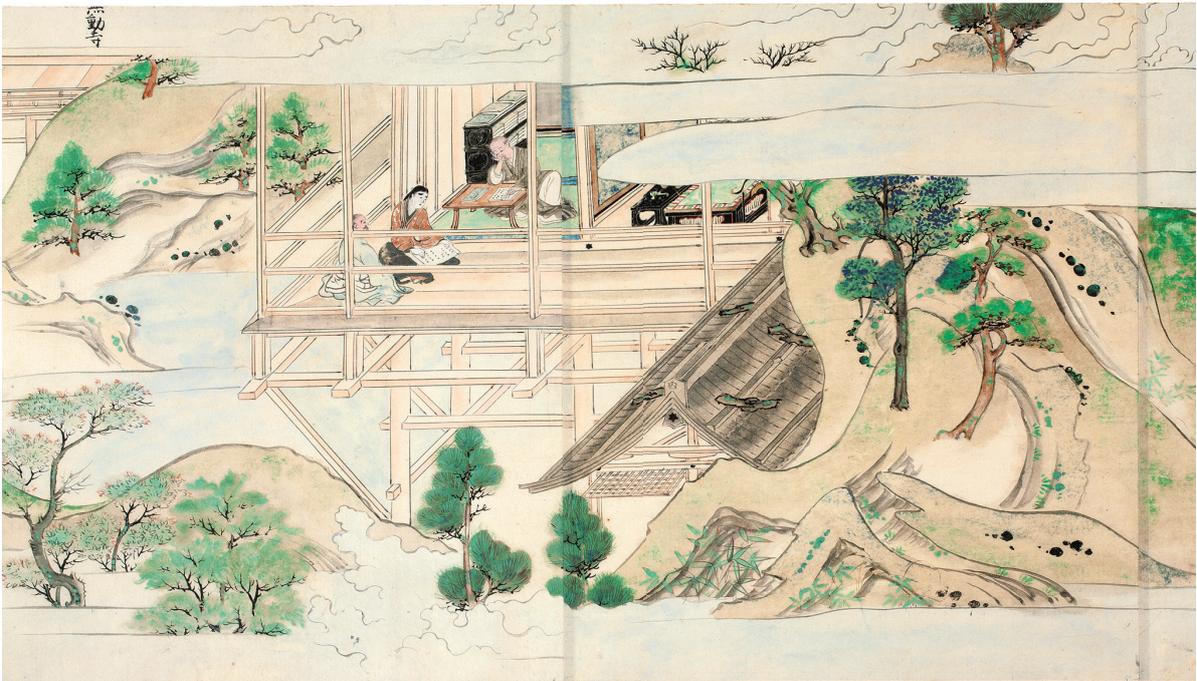
元表紙

第一段





絵①







聖人正年四十小いそる夏日中  
 佛ありしをくそりしに睡眠中  
 乃うらに阿修羅也を誨るるの  
 故に行正正也一箇浮のうら  
 賦のありし小すまは一人あ  
 大いさるるを復なりしを  
 いふもをむらぬ乃に生るる  
 一白清淨のうら大善善根の因を  
 か善根福徳の因縁をりしは  
 小せりし海に東乃くそりて  
 せしをを落知をくくはるる  
 性乃葉因小く人かしくや  
 疾行の味因をくくをた  
 なる因縁念佛にんを融通  
 一人の行正正也聖人のいそる

第二段



疾行の跡目を、くらくとたおひ  
 むる園點念佛、これをも駐通三併  
 一人の行どて衆人のいさ衆人ゆとも  
 らく一人乃りといさ、ねふ口徳も廣大  
 なるはとも明かろう一人もはせしめ  
 人も世生とてけいあうるひあふ、  
 何れ陸軍の表現、くの、  
 ぶふふ、い、あ、あ、あ

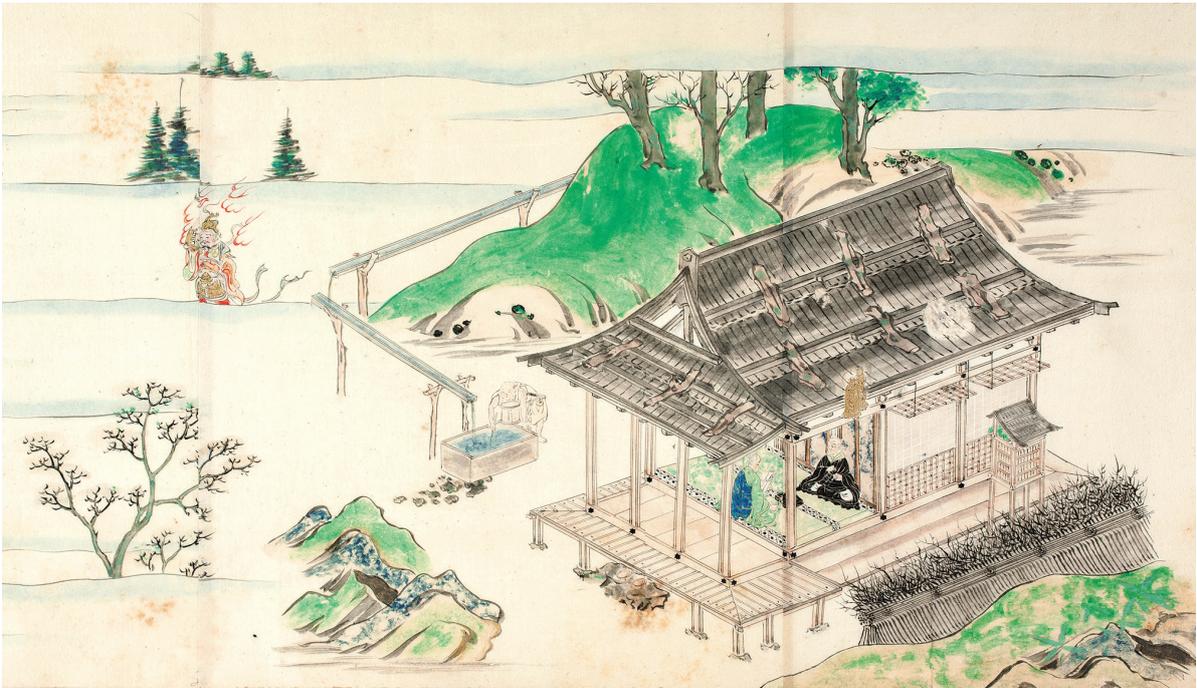
絵②

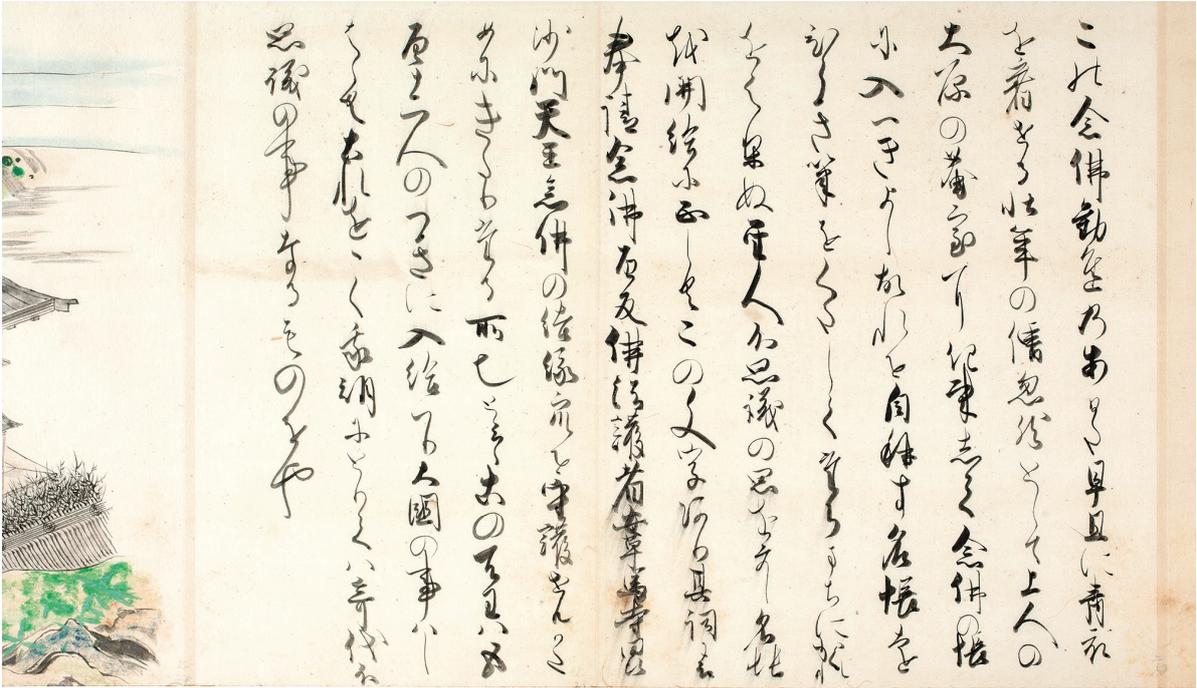


念佛勸進乃、くらくと、  
 行者とてわび、天徳元年、  
 乃く聚あふ、くらくと、  
 道徳男女貴職、か相合小、  
 乃くあ、くらくと、  
 龍録、くらくと、  
 名子事、くらくと、  
 大い、くらくと、

絵③







此れ念佛動念乃ありし早且に青衣  
 と着きし北平の僧忽然とて上人の  
 大原の善願下りて東去りて念佛の悟  
 小入一子よりなりと自許す名振を  
 記しき筆とくくくくくくくくくく  
 なくぬ人不知識の思ふなり名北  
 平湖給ふふくこの又字あり其詞  
 本清念浄石及佛経讀者善書善書  
 少門天王之伴の信縁ありと守護せん  
 少ふまゝもそる可しとておのまゝに  
 有る人のつぎに入給つて大園の事ハ  
 なくもそれとくくくくくくくくくく  
 之儀の事なるものなり

「第四段」

絵④



又上人天康二年四月廿日  
 于鞍馬寺(春) 念佛一信 小宣判

「第五段」

又上人天来二年四月廿日此鞍馬有春  
 諸志をくもす念伴一信小宣判  
 くらりに天日幻化のこくもく上人小  
 ほくくのこくもくもくもく念伴夏  
 うもくもくもくもくぬれ砂とるる事  
 へののこくもくもくもくもくもくもく  
 ちくもくもくもくもくもくもくもくもく  
 西小入治つる名場これをもくもくもくもく  
 小くもくもくもくもくもくもくもくもく  
 並治つるもくもくもくもくもくもくもく  
 見れもくもくもくもくもくもくもくもく  
 これとれもくもくもくもくもくもくもく  
 あは  
 林天王部判清光夏 帝天部判清光夏  
 持國部判清光夏 源長部判清光夏  
 廣目部判清光夏 吉祥部判清光夏  
 飛鳥部判清光夏 比呂部判清光夏

春海部判清光夏 前若部判清光夏  
 引部判清光夏 菅部判清光夏  
 保部判清光夏 宗部判清光夏  
 日部判清光夏 吉部判清光夏  
 御部判清光夏 熊部判清光夏  
 林部判清光夏 金部判清光夏  
 廣部判清光夏 菅部判清光夏  
 小部判清光夏 柳部判清光夏  
 内山部判清光夏 三島部判清光夏  
 二部判清光夏 服部判清光夏  
 女部判清光夏 多度部判清光夏  
 住部判清光夏 相部判清光夏  
 大原部判清光夏 大原部判清光夏  
 氣部判清光夏 河部判清光夏  
 任部判清光夏 瀬部判清光夏  
 山部判清光夏 伊部判清光夏  
 下部判清光夏 伊部判清光夏  
 兵部判清光夏 三尾部判清光夏



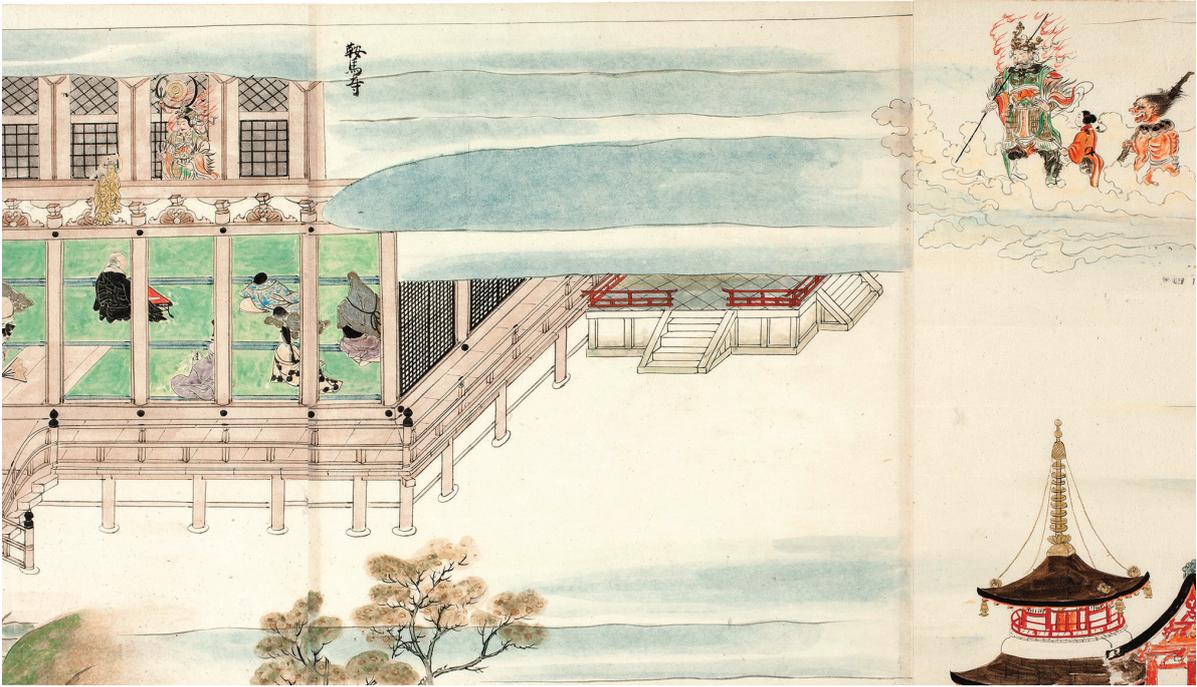


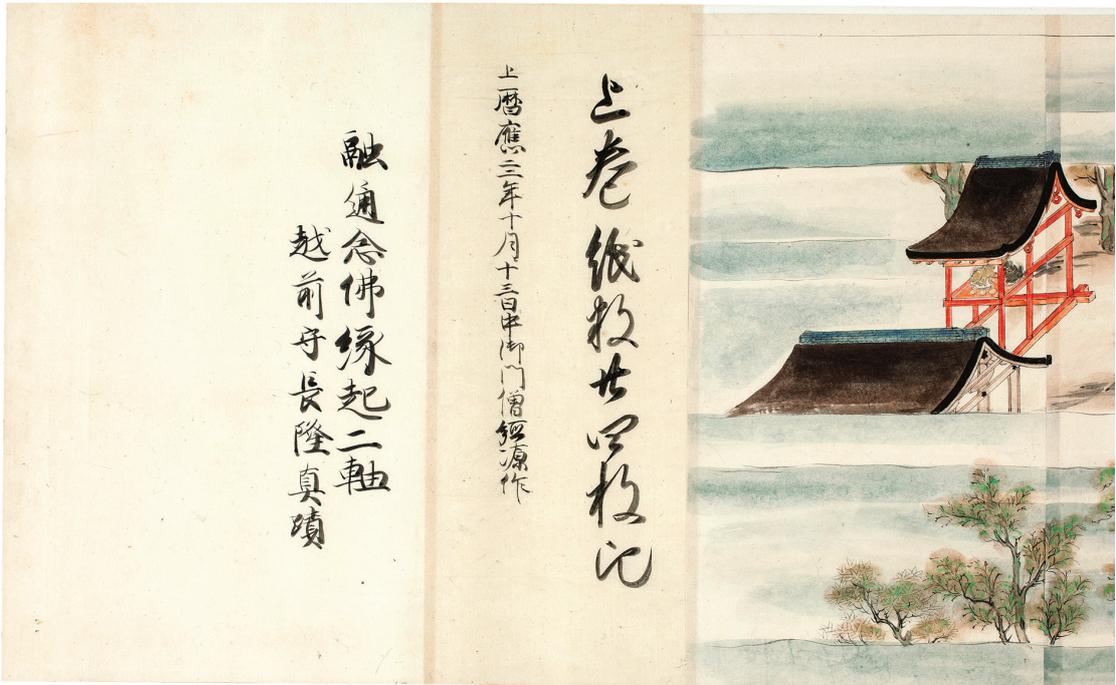
海邊神神とてあまの御孫に  
 乃神神とてあまの御孫に  
 天孫の御孫とてあまの御孫に  
 天孫の御孫とてあまの御孫に  
 天孫の御孫とてあまの御孫に

絵⑤







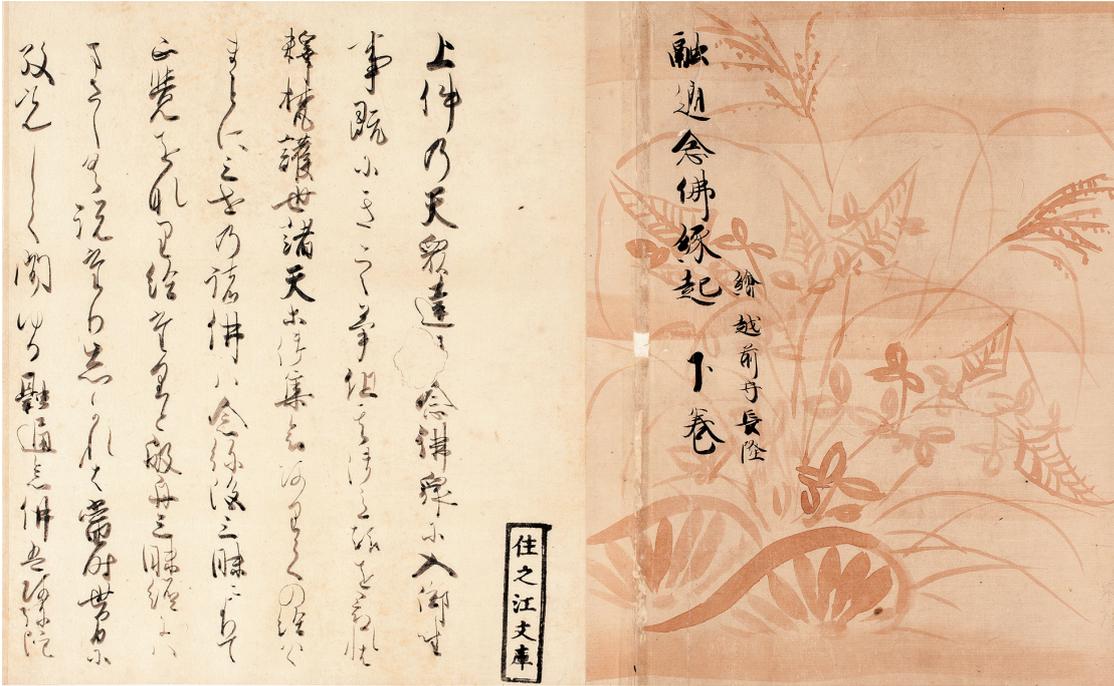


上卷 紙教世間抄記

上曆應三年十月十日中河内僧經源作

融通念佛緣起二軸  
越前守長隆真蹟

〔奥書識語〕



融通念仏縁起

下巻

繪越前守長隆

住之江文庫

第一段

元表紙

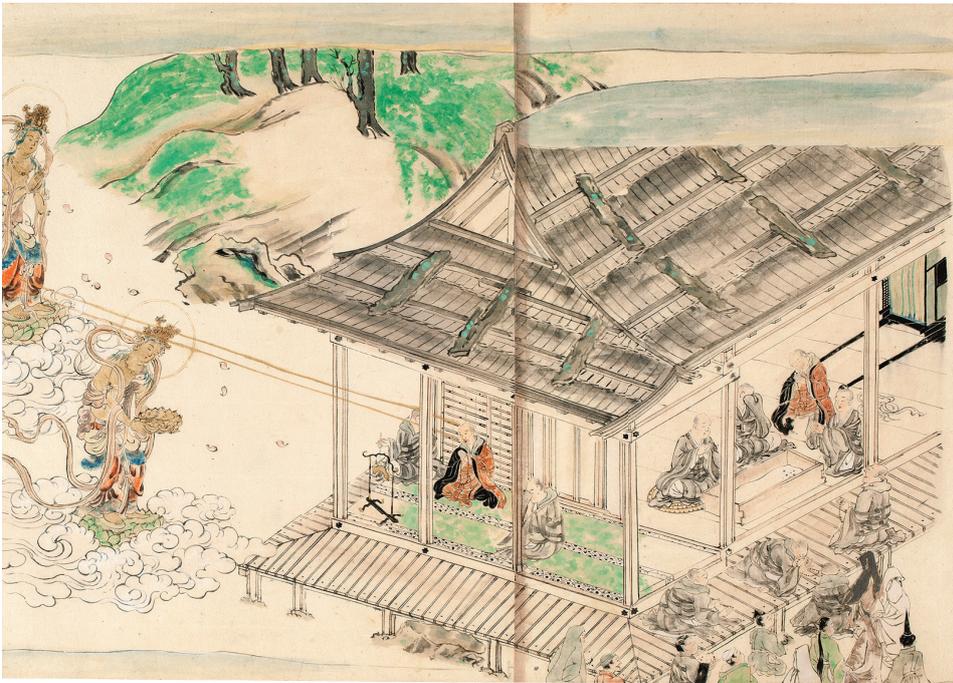
是書ありて一冊小法約束ありて  
 といふは乃神道神祇のやむべし  
 東に下れ真流すは神祇後乃多きを  
 かく信末して衆小法を念併し終  
 何んぞ神道なる乃しこのれ其は併  
 小多かりては法をさし下はれこの  
 併亦小を併し入れて法を同じく  
 信の念併者なりて法を法天念併  
 程也亦亦も念併衆七又諸天の十信念  
 併法通之ん我あはは乃行のり重  
 事念併又通之ん法を信人の出類  
 乃新とありて法を念併者なりて  
 毎日信百萬遍のり者や其法力のり  
 者も小かよりて自然にたれり神  
 するは自力を法をたれり神に  
 の信力點の自念併にや也其のえ法を  
 といふは小日本よとをさし人  
 西法に神道同く名号して法を  
 といふは法をたれり神に神道又





して三つ切実難  
 のりれりさゆきや  
 法蘭西思皆代乃いれ有れに信務や二  
 併済まは後とさうくともいひつひ人信  
 信後の身持小信心より信利して動生好  
 さまつりや一様人信のいれさるる信後誠  
 ぬさつはんくもりさるる高の表いささき  
 願小く見しうりえん 是も信の事なり

絵①



事このものいへり  
 よふ可あしり入棺の時そのの罪  
 しくりさるり信の儀式後の不

絵②



上人書林十一條通五多に二月に於て  
 らく七日小死をよし海終るのま  
 て兼瑞あり具南草庵にたすむを若  
 幼小くも方の青嵐の夜よししむか  
 せんくふ業苗宮家の母にたはく樹木  
 原しりふ影をのてし以也鏡鋼鉄の  
 しくもさしりふは世の儀武言後のに  
 よふ可ふあしり入棺の時も月の影を

第二段

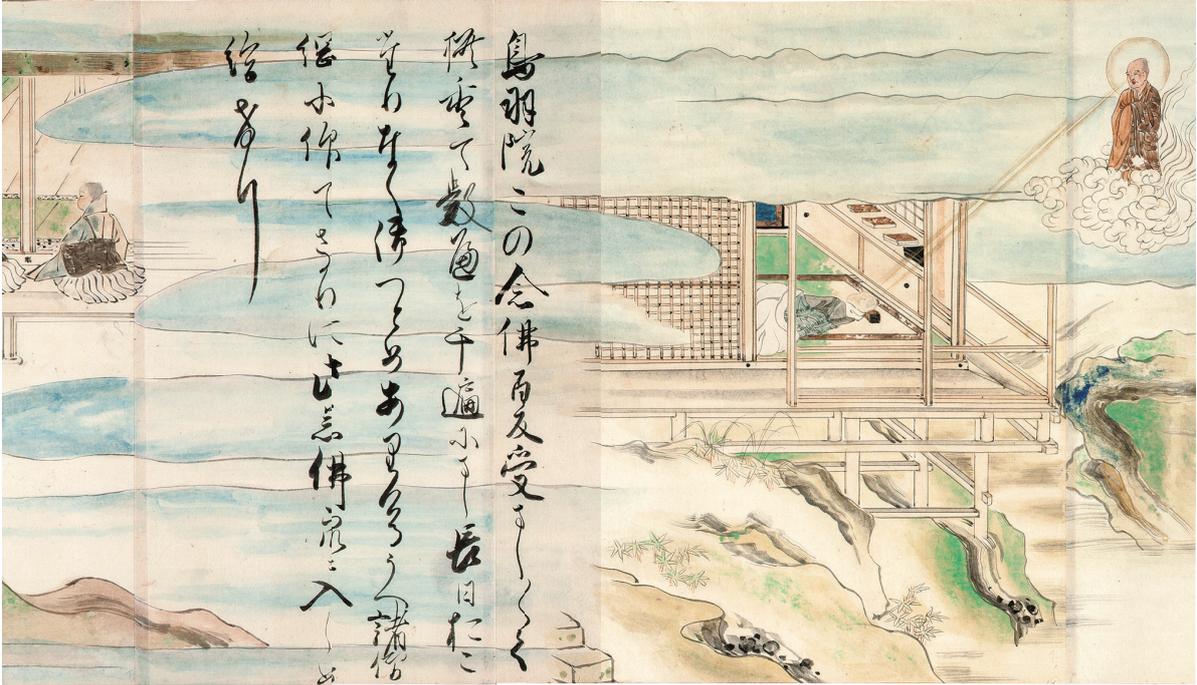




絵③

第三段





鳥羽院この念佛百受を  
 所重て敷敷と千遍小く長日たに  
 せりせし侍つとああるもろく諸位  
 信小作てきりには念佛入  
 信あり

絵④

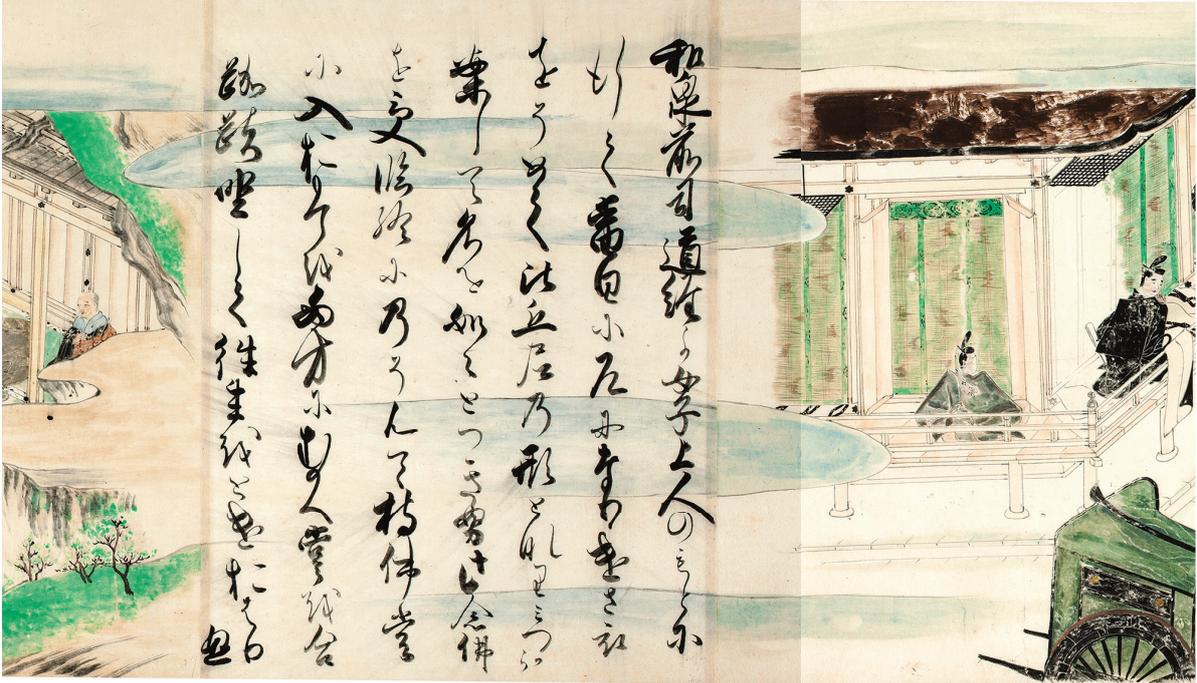
〔第四段〕



廣階より院この念佛を受まはせり  
 して深合對院より向のつる念佛  
 即六日の祿位小にたにるを  
 乃法殿とく目水亦對の御三件  
 此より  
 あり

絵⑤

〔第五段〕



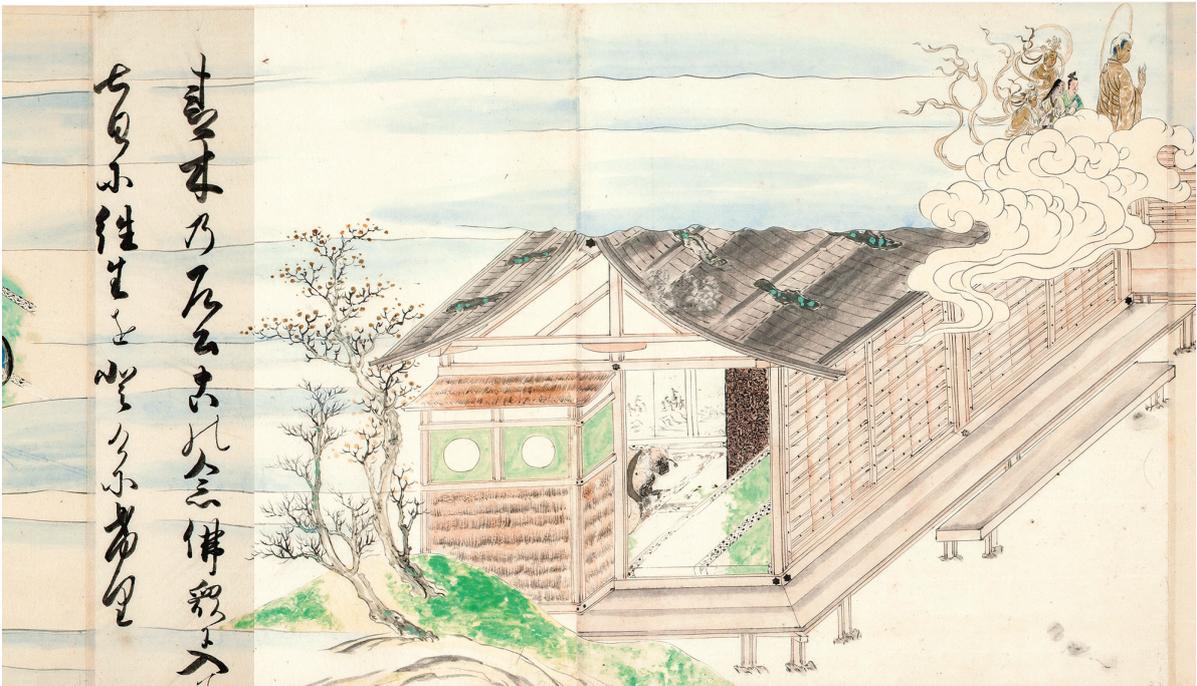
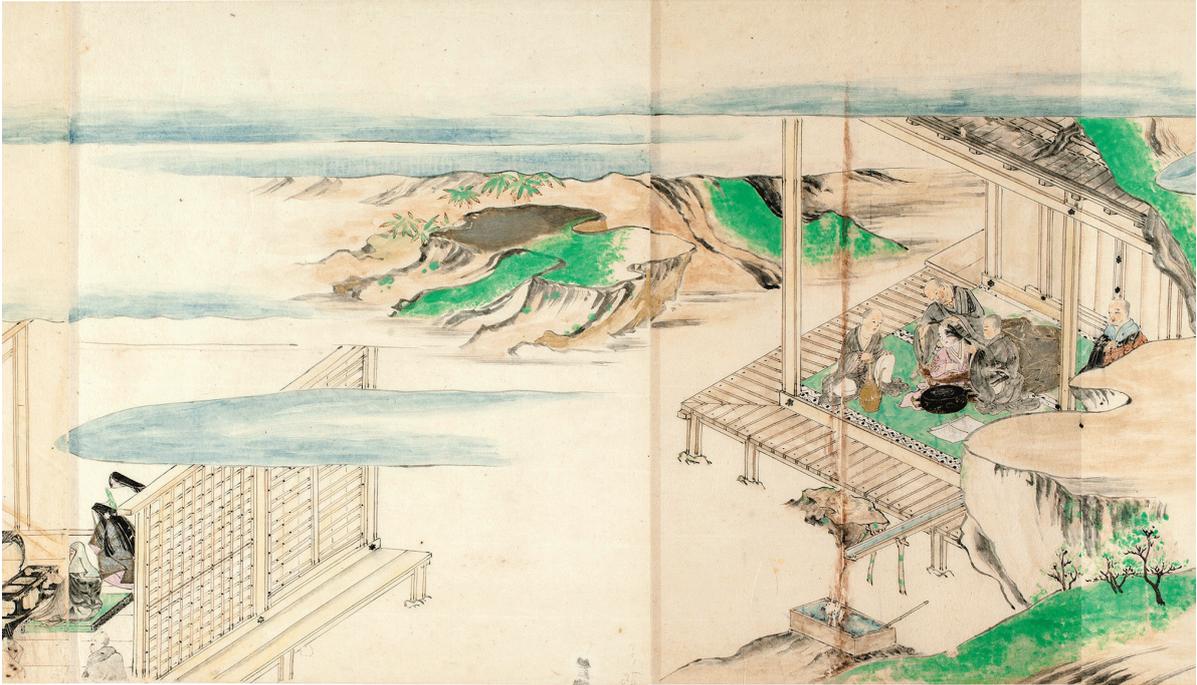
〔第六段〕

絵⑥



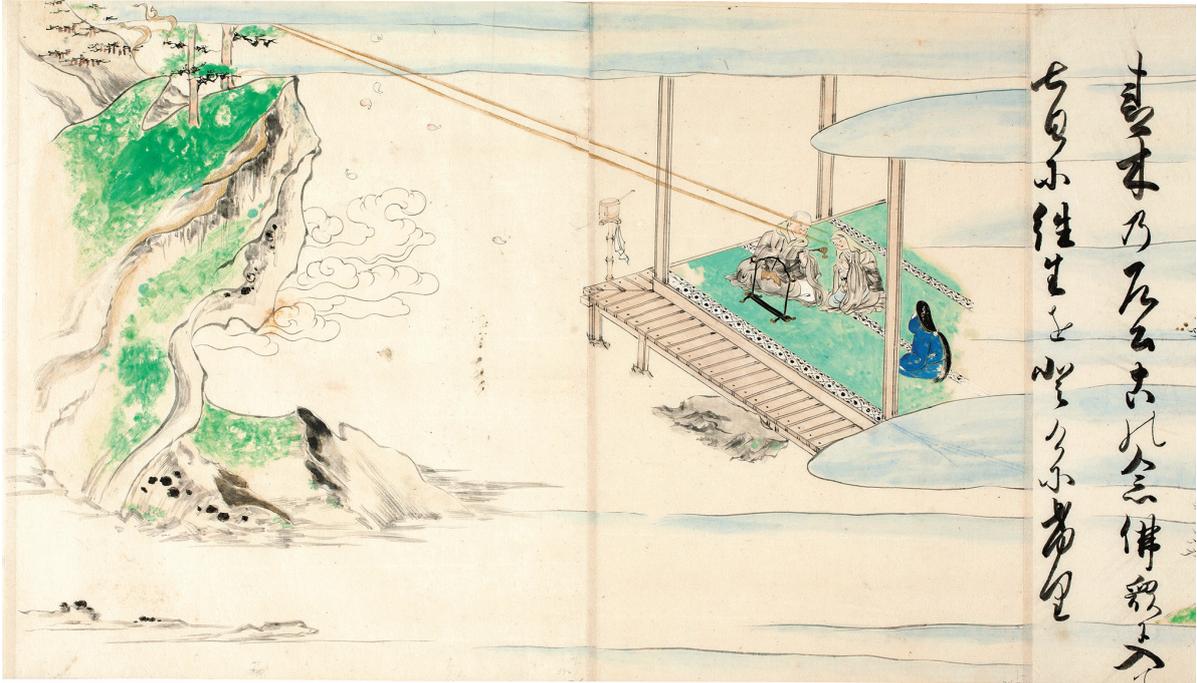
〔第七段〕

絵⑦



寺本乃乃公未凡念佛經入  
 古自不往生と望ふ不為也

〔第八段〕



其本乃乃云未此念佛經  
 古自不往生と坐系也

絵⑧



水白川乃下流、妻これ念佛之  
 之及とくもつる小らり之間磨乃  
 庭はかへるれより

第十段

絵⑩



絵⑨

「第九段」



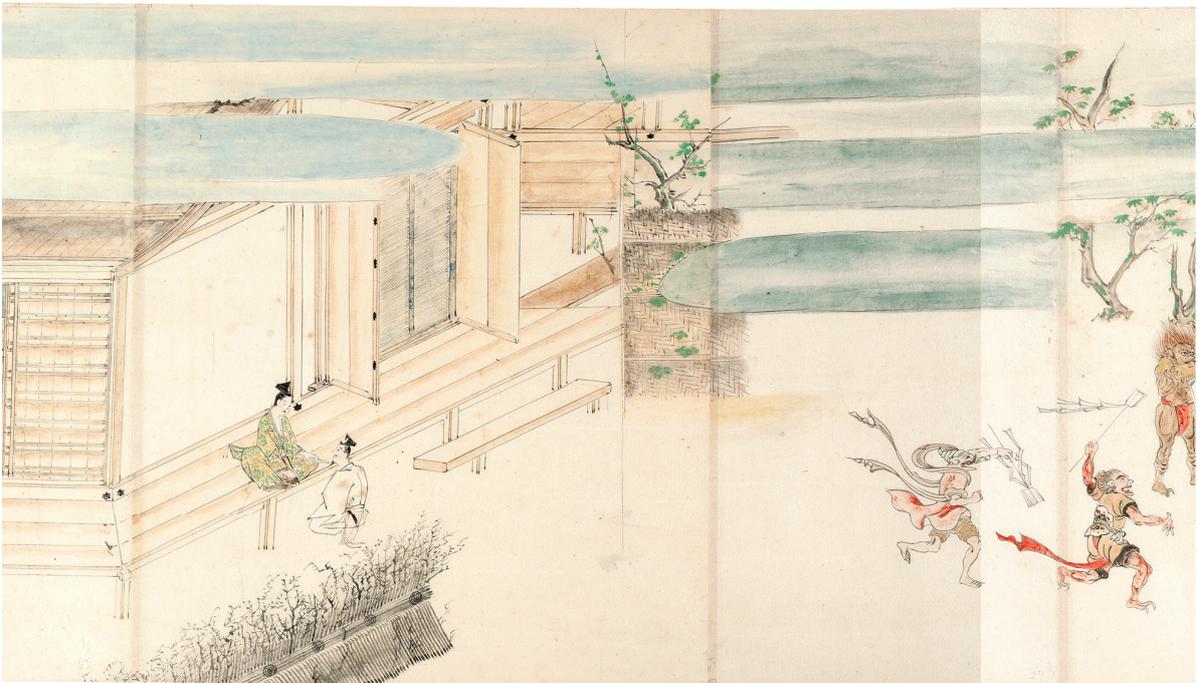






さいごのひりき事先誠心誠行とん  
 殊の時念伴のすしん事修福の  
 也なり念佛しるいふふ別可なり  
 き也長時よいかと怒くるれと別時  
 の新法をいふ人も人々念を同  
 いしといふんくすきと道なり

絵⑩





この卯城希小結さうう山林お名を  
 けりけりけりけりけりけりけりけり  
 うの子すけしすしすしすしすしすし  
 然乃そそそ遠國ささささのやさ  
 轉の国おさささささささささささ  
 所橋ふゆなをををををををををを  
 あささささん識好のとふささささ  
 法長法縁乃ささささささささささ  
 下あつこれこれこれの事物先後  
 を侍さささささささささささささ  
 うも名橋さ入法さささささささ  
 若教をさささささささささささ  
 の事懐さささささささささささ  
 けりけりけりけりけりけりけり  
 ささささこれをさささささささ  
 左家の書めさささささささささ  
 無ささささささささささささ  
 与向作はささ

御筆者 管倉我名 若春休息



〔奥書識話〕



繪⑫

